

ブラウザから使える電子カルテ

赤川 直人
担当PM： 笥 捷彦

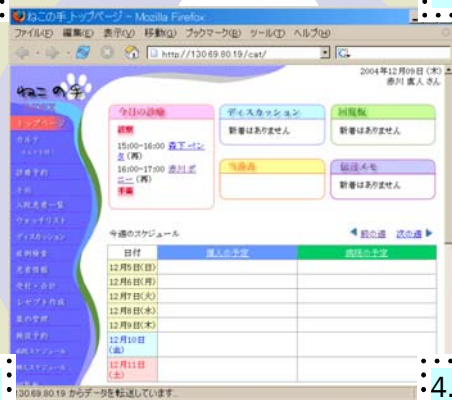
この電子カルテの4つの柱

1. 電子カルテ

2. 医療スタッフ同士の
コミュニケーション
ツール

3. 患者さん同士が互
いに支えあることの
できる場

4. 病院同士を連携さ
せる“つなぎ役”



開発の動機

電子カルテの価格は、数千万円から数億円。維持費にも高額のコストがかかります。しかも、電子カルテはプログラマーが開発しているため、医師にとってはとても使いにくいというのが現状です。

そこで、獣医師である私が、使いやすい電子カルテを作ろう。そして、多くの病院に使ってもらい、日本の医療の質を向上させたい。そんな思いから、開発をスタートさせました。

1. 電子カルテ

私は、獣医師として、病院で診察も行っております。開発にあたっては、現場での経験を生かし、使いやすさを第一に考えながら、作りました。

また、他の医師や看護師に読まれると困る内容も時々あります。そこで、どのスタッフならば読むことができるのか、そして、患者さん本人に公開しても良いか、書き込むときに指定することができるようになっていきます。

3. 患者さん同士が励まし合える場

病気になると、誰しも不安になります。そのようなとき、同じ苦しみを抱える人たちが集まり、互いに支え合うことができれば、大きな励みになります。そのような場を提供するための機能が、このカルテには盛り込まれています。

2. 医療スタッフ同士のコミュニケーションツール

通常、一人の患者さんに対し、複数の医師や看護師が治療にあたっていきます。そこで、スタッフ同士のコミュニケーションをどのように図っていくのか、どの病院でも悩みの種となっています。

そこで、スタッフ同士のコミュニケーションを円滑にすすめるための機能を盛り込んでいます。

4. 病院同士を連携させる “つなぎ役”

このカルテは、ブラウザから使えるカルテです。このシステムであれば、日本に一カ所、電子カルテセンターを置き、病院からはブラウザを通してアクセスすることで、そのカルテを使うことができます。つまり、一つのカルテを全国の病院で共有することができるのです。いわば、日本中の病院を串刺しにして、一つの巨大病院に仕立て上げてしまおうというわけです。

このシステムであれば、1億2千万人のカルテデータから統計情報を取りだし、診察に生かすこともできます。再診の知見も全国の病院で共有できます。離島の病院と本土の病院を結び、離島にいる患者さんの治療にあたることもできるようになります。